

# スタインベックの物語世界

## ——人間存在に宿る集団と個人の二重性<sup>(1)</sup>

上 優二

(はじめに)

ジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-68) の人間観は人間が地球の生態系の中で他の生物と同じように「一つの種」にすぎないという認識から出発する。その物語世界では、人間は自然環境の中で、他の生物と同様に熾烈な生存競争を演じるという世界像が克明に提示される。『ハツカネズミと人間』(*Of Mice and Men*, 1937) や『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939) などの作品では、自然環境における生物界の生存競争の様相が冒頭に提示され、その後人間社会における生存競争の物語がこれに折り重なるように描かれる。

彼は紛れもなく人間社会を生存競争の舞台であると捉え、人間がその生存競争に勝ち残るために集団を形成する性向をもつことに着目する。この時、集団は個人の生命維持のための「連帯」という機能を果たす一方で、集団の存続のために、個人の意思を支配しその尊厳を圧殺するという機能も併せ持つ。このパラドキシカルな人間の性向、すなわち集団と個の二重性は、彼が生涯取り組んだ主要テーマのひとつであり、その物語世界に描かれる人間観の特質となっている。

スタインベックはその物語世界を構築するにあたり、あるがままに現実を捉えようとする「非目的論的思考」という思考態度・認識方法を常に意識し保持してきた。人間は往々にして身勝手な夢や期待のもと己の住む世界を理解・解釈する生き物であ

る。彼はその人間の特質を客観的に、時に冷徹な目でその夢の破綻を繰り返し描きだしてきた。結果として、夢の破綻は彼の物語構成の重要な柱のひとつとなっている。その一方で、この「非目的論的思考」は日常の現実世界の壁を突き破り「19世紀アメリカ超絶主義に酷似した神の概念」へと結びついていく。その物語世界では人間は各自が宇宙の根源的な存在「一なる者」と結びつき、自己に内在する「神性」を感得することができるという。スタインベックの理想的な人物像はこの「神性」を感得した人間像として様々に形を変えてそれぞれの物語世界に登場することになる。

さて、フレデリック・I・カーペンター (Frederic I. Carpenter) はその論文“The Philosophical Joads”の中で、『怒りのぶどう』の思想的特質として、[1] ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson) の神秘的な超絶思想 (大霊思想)、[2] ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) の現世的な民主主義思想、[3] ウィリアム・ジェイムス (William James) とジョン・デューイ (John Dewey) の現実的なプラグマティズム、の3点を上げている。

ウォレン・フレンチ (Warren French) は *John Steinbeck* (1961) の「序論」の中で、スタインベックの作品に見られる一般的な傾向として [1] アレゴリーの手法、[2] 非目的論的思考の表明、[3] 19世紀アメリカ超絶主義に酷似した神学、の3点をあげている。またレスター・J・マークス (Lester Jay Marks) は *Thematic Design in the Novels of John Steinbeck* (1969) の「序論」の中でスタインベックの作品に終始一貫して現れる主題の構想の型として、[1] 固有の宗教的欲求を満たしてくれる神の創造、[2] 生物学的見地に立つ「集団動物」、[3] 非目的論的概念、の3点をあげている。三者とも的確で示唆に富む論点であるが、それぞれに難点をもつ。

本論では上記の批評家の論点を勘案した上で、スタインベックの物語世界の特質として [1] 「生物学的見地に立つ人間観」、[2] 「非目的論的思考の展開」、[3] 「19世紀アメリカ超絶主義に酷似した神の概念」という3点を掲げることにする。もとより、この3つの特質は相互に絡み合い重複するものであり、本論を展開するにあたり便宜上分類したものである。

本論の狙いは上記の3つの特質を念頭に置きながら、集団と個人に宿るパラドキシ

カルな人間の性向、すなわち集団と個人の二重性に焦点を絞り、スタインベックの物語世界における人間の生の意味を模索することにある。

(一)

スタインベックは生涯、個人の自立を認めない集団の特質を意識的に描きつづける。その特質は『長い盆地』(*The Long Valley*, 1938) 収録の「自警団」“The Vigilante”や「襲撃」“The Raid”などに登場する暴徒の姿に描かれている。その暴徒は単なる個人の寄せ集めではなく、別の生き物へと豹変し暴発し、その構成員には個の自立は認められない。

さて『勝算なき戦い』(*In Dubious Battle*, 1936) は「大恐慌」(the Great Depression) を背景に1930年代中期のカリフォルニアの労働争議を扱ったリアリズム社会小説である。その主要人物、ジム・ノーラン (Jim Nolan) は孤独で空疎な生活を送る若者であったが、共産党に入党後、党に対する帰属意識と使命感を抱きその生を燃焼させようとする。彼は集団に帰属することでその孤独から抜け出すが、その姿は孤独を貫きその集団を冷静に観察するドック・バートン (Doc Burton) の生き方と好対照をなす。<sup>(2)</sup> ジムはマック (Mac) の指導の下、有望な党員へと変貌し、リンゴ園のストライキを組織しマック以上の指導者ぶりを発揮する。しかし、そのストライキ闘争の渦中で、リンゴ農園の自警団員に射殺されてしまう。マックはジムの葬儀にその無残な死体を演壇の上に置き、再び戦えと運動員達を扇動する。

この作品では、ストライキに参加する農民達が集団の目的達成のために、組織の細胞となり暴徒化する姿が強調されている。ドック・バートンはその集団と接しながらも距離を置き、善悪の問題に捉われずその集団行動を客観的に観察しようとする。すなわち、彼は「非目的論的思考」の立場から、集団に埋没する人間群を「<sup>グループマン</sup>集団人間」と名づけ、その集団の特質を次のように述べている。

「<sup>グループマン</sup>集団人間」はいつも何かに感染している。今回は悪い感染のようだ。マック、私は見たいんだ。この「<sup>グループマン</sup>集団人間」を観察したいんだ、というのも私には彼らは個人の集まりではなく、新しい個人のように見える。集団の中にいる人間は、全く本人とは違い、有機体の中の一つの細胞なんだ。それは体の中にある細胞が本人ではないの

と同じく、本人とは別のものだ」(150-51)

スタインベックはこうした人間集団の在り方の根拠となる理論を「ファランクス」(the phalanx)と呼んだ。この「ファラックス」は要約すると「個人の行動は集団行動との関わりの中で変容する」という概念である。換言すれば、集団の組織体は構成する個人の意思を吸収・統合し別の生き物として生まれ変わり、新しい行動をとることになる。『勝算なき戦い』では集団はストライキに参加する個人を吸収し、時に暴徒化し、新しい生き物となりその目的に向かって行動する。こうして個人は集団の中で個の自立を失い埋没し、集団化した生態を見せる。ただ、マックとジムはそうした「<sup>グループマン</sup>集団人間」の一員でありながらも、その集団行動を先導し、その中心的な役割を果たし、集団の中にあっても自立しているようにみえる。ドック・パートンはその指導者の機能に関して、マック自身に次のように説明する。

たぶん君は、原因であると同時に結果でもあるんだ、マック。君はたぶん、<sup>グループマン</sup>「集団人間」の発現するもの、例えば、目の細胞のように特別の機能をもった細胞なのかもしれない。君は目のように、<sup>グループマン</sup>「集団人間」から力を引き出し、同時に<sup>グループマン</sup>「集団人間」を導いている。君の眼が、君の脳から命令を受け、かつ脳に命令を出すようにね。(151)

ドック・パートンの視点から見れば、マックもジムもまた他の<sup>グループマン</sup>「集団人間」と同じく、組織体の細胞であり、その目的達成のための器官であり、集団の意思を表出する役割を担っているにすぎない。こうした「指導者細胞論」というべき概念は『長い盆地』収録の「人々を率いる者」“The Leader of People”のなかにも読み取ることができる。ジョウディ少年の祖父は、西部開拓時代の自分の姿を次のように回想している。

大切なことは、大勢の人々が這い進む大きな一頭の獣となったことだ。そして、わしはその頭だった。その獣は西へ西へと進み続けた。誰もが自分のやりたいことを抱えていたが、みんなが集まってできた、その大きな獣の望みは、ただ西へ西へと行くことだけだった。わしはそのリーダーだったんだ。しかし、もしわしがいなくても、

他の誰かが頭になっただろう。この獣には頭が必要だったからだ。(302)

この回想によれば、西部開拓民達は同じ望みを共有する一頭の大きな獣となって西へ西へと進んでいく。その際、個人の望みはさておき、何よりも西へ西へと邁進する集団の望みを優先させたという。この集団は明らかに『疑わしき戦い』の農民達と同じく<sup>グループマン</sup>「集団人間」の姿を示している。特筆すべき点は祖父がその集団の意思を代表する指導者であるが、場合によっては交換可能な指導者であるということである。この立場は「もしわしがいなくても、他の誰かが頭になっただろう」(302)という言葉に端的に示されている。この指導者(祖父)は歴史を創造する主体者ではなく、歴史の創り出した産物として描かれている。

また『怒りのぶどう』の第14章の中で、語り手は「…ペイン、マルクス、ジェファソン、レーニンは結果であって、原因ではない…」(206)と回想し、かつ、「民衆の困窮が理念を生み出し、理念が民衆を行動へと駆り立て」(207)、その時代を動かしていくという歴史観を表明している。『怒りのぶどう』に即して言えば、逆境の中を生き抜く民衆の「生の意思」が理念を生み出し、その理念が民衆を行動に駆り立て歴史を作っていく、という歴史観の表明である。換言すれば、民衆の意思の総和が時代の要請となり指導者とその理念を生み出していくという歴史観である。この場合、例えばペインやマルクスという人物が途中で倒れれば、別のペインやマルクスが登場することになる。これは指導者の主体性の問題はさておき、民衆の生命の総和が歴史の原動力・推進力となるという認識を強調したものである。

(二)

『月は沈みぬ』(The Moon Is Down, 1942)はナチス・ドイツを模した侵略軍が民主主義を代表する小さな町を占領するが、市民の激しい抵抗に遭いその敗北の影に苦しむという物語である。この作品においては、先の<sup>グループマン</sup>「集団人間」は一方で「集団人」(herd man)と呼ばれ、ナチス・ドイツの侵略軍がその特質を顕示する。「集団人」(侵略兵)はその軍隊組織に隷属し集団の中に埋没し個の自立を保っていない。その一方で、市民側の<sup>グループマン</sup>「集団人間」は「自由人」(free man)と呼ばれ、自立した個人として、民主主義の回復という集団目標に向かい占領軍と対峙する。

さて、この作品はプロパガンダ小説であり、侵略軍を悪の集団、市民組織を善なる集団として捉えている。そして、両集団が生存競争の戦いを演じる際、まずは悪の集団の生存能力の高さを示すために、侵略軍が圧倒的な力を誇示する姿が描写される。すなわち、占領軍が市民の防衛軍を一方的に攻め込み、瞬時に6人を殺害し3人に瀕死の重傷を負わせ、残りの3人を山へと追い込む。これに対し、市民集団（自由人）は惨敗し追い詰められながらも反転攻勢に打って出る。そしてオーデン市長は占領軍による処刑の場に立つ時「いつも戦闘に勝つのは集団人ではあるが…戦争に勝つのはいつも自由人である」（186）と宣言する。彼は集団の中にあっても個人の自由意思を堅持し、集団を導く役割を果たしている。しかも彼は「小さな人間の中に火花がありそれが大きな炎へと燃え盛る」（177）と述べて、市民一人ひとりが個人の自由意志をもつ主体者であることを示唆する。個人に宿る「火花」は「自由な個人の意思」であり、燃え盛る「炎」は個人の意思の総和であり歴史を動かしていく原動力・推進力である。こうした文脈のもと、オーデン市長は「集団人」と「自由人」の特質の違いを次のように指摘する。

彼ら（占領軍）は自分達が一人の指導者と一つの頭しかもっていないので、われわれもみんな同様だと考えている。彼らは10の頭が切り落とされると、自分達が破滅することを知っている。けれど、われわれは自由の人民です。われわれは人民の数だけ頭をもっている。そして必要なときには、指導者がキノコのように、われわれの間から現れてくる。（175）

市長は自分が処刑された後、「新しいオーデン市長」が誕生し市民側が必ず勝利することを予告する。「自由人」はみんなが「新しいオーデン市長」になり変わる潜在能力をもつからだ。注目すべきは、「私の人々の障害になってしまったら、彼らは私なしでもやっていくでしょう」（183）という発言で、「集団の意思」にそぐわない指導者はいつでも排除されるという認識も示している。この認識は「アメリカ独立宣言文」に掲げられている、政府の「正当な権力は被統治者の同意に基づく」（165）とする米建国以来の伝統を反映している。ともあれ、市長は指導者として集団の意思を吸

収・統合し、かつ創生する役割を果たしながら、最終的には自分が集団の意思に左右される一つの「細胞」にすぎないというパラドクシカルな立場を自覚している。

オーデン市長はこのパラドクシカルな立場を踏まえたうえで、自分が「実際よりもより大きくより良い存在であるかのように、ある種の高揚感を感じている」（178）。この高揚感はスタインベックの他の作品群の文脈を勘案する時、市長が自己に内在する「神性」の輝きを感じ得ているものと読み取れる。この市長の指導者像は、『疑わしき戦い』のマックとジムより『怒りのぶどう』のジム・ケイシーの方に近い。スタインベックは『怒りのぶどう』の中で、人間存在に宿る集団と個人の二重性に注視し、集団と個人の和解を模索し、19世紀アメリカ超絶主義に酷似した人間観を再現する。（三）

『怒りのぶどう』では、大銀行の行員が負の「<sup>グループマン</sup>集団人間」として登場してくる。行員は銀行の巨大な組織体の細胞となり、利潤追求という集団目的ための道具となり自立できていない。語り手は、その銀行と行員の関係について、「銀行は人間で構成されているにすぎない。しかし、銀行は人間の集団を超えた存在である。…銀行は人間で構成されてはいるが、人間は銀行をコントロールできない」という旨（31）を述べている。しかも、銀行は悪の組織体として、生存競争の戦いで圧倒的な力を見せつけ、人間生命を貪り食う「<sup>モンスター</sup>怪物」として登場している。裏を返せば、個人や家族は銀行や大企業という巨大集団の冷酷な圧力に屈し、なす術もなく翻弄されていく。しかし、彼らは巨大集団に対抗するために生の連帯を築き、生存する力を拡大していく。語り手はその生の連帯の過程を次のように語る。

日が暮れると、不思議なことが起こった——20の家族が1つの家族になり、子供達はみんなの子供達になった…毎夜、必要なものすべてが完備された1つの世界が創造された——友達が作られ、敵が定められた。法螺吹き、臆病者、おとなしい人間、慎み深い人間、優しげな人間が全部揃っている一つの世界が。毎夜、1つの世界を作る人間関係が打ち建てられた…。（265）

この集団はやがて民主主義の理想を体現した「政府キャンプ場」という組織体へと



連結していき、非人間的な資本の権力の対極に立つことになる。移住農民達は「政府キャンプ場」から資本家の犬となった警察を排除し、自分達の代表を選ぶ選挙を実施し自らの法律も制定する。さらに、思想・信教の自由を保障し、「どんな（宗派の）牧師も説教をすることができる」（392）という組織体を構築し輝かしい生の連帯を創造する。<sup>(3)</sup> 語り手はその原動力となるのが「胃袋の飢え」、「増幅された飢え」（204）、つまり「生存への欲求」であると語る。これは民衆の「生存への欲求」、つまり「集団の意思」が人間社会をつき動かし歴史の原動力・推進力となるという基本的な歴史認識を改めて示すものである。

さて、スタインベックは『コルテスの海航海日誌』（*The Log from the Sea of Cortez*, 1951）のなかで、「個人は集団に属しその集団は大集団に属するというプロセスを続けていくと、宇宙の根源的存在に結びつくことになる」（趣意）（216-17）という「ファランクス」論（全体論）を展開する。また「人間の宗教的感情も神秘的感情もほとんどが真の意味で万物との共感である」（趣意）（217）と述べ、「万物との共感こそが、イエス・キリスト、聖アウグスティヌス、聖フランシス、ロジャー・ベーコン、チャールズ・ダーウィンやアインシュタインのような人々を生み出してきた」（趣意）（216-17）と力説する。ジム・ケイシーはこうした文脈に立ち、「たぶんすべての人が一つの大きな魂を持っていて、それぞれがその一部なんだ」（33）とその宗教的体験の感動を表現する。さらに彼はその万物との共感を感得した経験を、「山々があり、自分がいて、そして我々はもはや別の存在ではなかった。我々是一个の存在であり、ひとつの存在が神聖だった」（110）と表現する。

フレデリック・I・カーペンター（Frederic I. Carpenter）は *Steinbeck and His Critics*（1969）所収の論文“The Philosophical Joads”の中で、このケイシーの言葉を引用し、「…エマソンの大霊がオクラホマの大地に出現した」（242）と述べ、エマソンの「大霊思想」との類似をいち早く指摘している。また、マーチン・ステイブルズ・ショクリー（Martin Staples Shockley）もその論文“Christian Symbolism in *The Grapes of Wrath*.”の中で、「ケイシーの大霊の知識はエマソンやホイットマンのものと同一源から引き出されている…」（268）と述べて、ケイシーの言動にアメリカ超絶主義の「大霊思想」を認めている。この点、多くの批評家がそれぞれ濃淡をつ

けながらもこの解釈を踏襲することになる。

ケイシーは開眼後ジョード家をはじめとする移住農民達、つまり民衆という大海の中に入っていく。彼はトムの子代わりとして牢獄に入り再び啓示を受け、出獄後その身を民衆の労働運動に捧げる。しかし、その労働運動の渦中に頭蓋骨を打ち砕かれ壮絶な死をとげることになる。彼は死の直前、「お前たちは自分のやっていることを理解していない」（527）というイエス・キリストの言葉を発し、救世主のイメージを彷彿とさせる。また Jim Casy と Jesus Christ が同じイニシャルというのも作者の意図は明白である。この両者の類似に関し、H. ケリー・クロケット（H. Kelley Crockett）は *A Casebook on The Grapes of Wrath*（1968）所収の“The Bible and *The Grapes of Wrath*”の中で印象深い批評を残している。

彼らはヨルダン川のような生と死の象徴である流れの中で、ついにその懐中電灯の強い閃光で彼「ケイシー」をとらえた、そして彼は「お前たちは自分のやっていることを理解していない…」という、十字架に架けられたキリストの言葉を語り継ぎながら、彼らの棍棒のもとに倒れた。しかし、迫害者にとって、彼の死の中に勝利は全くない——彼の精神はトムの中に、そして象徴的にはすべてのオーキーズ[移住農民達]の中に復活するからだ。（110）

ケイシーの精神は「トムに、そして象徴的にはすべてオーキーズの中に復活する」（110）という指摘は今でも新鮮である。ケイシーの精神はトムに引き継がれるが、たとえトムがその戦いの渦中に倒れてもその精神は次の指導者に引き継がれ、そのプロセスは果てしなく続く。この認識は「民主的な集団からは、ある指導者が倒されてもその集団から同じ精神を引き継いだ指導者が誕生する」（趣意）という先のオーデン市長の叫びと一致する。確かにここでも指導者は集団の中の一細胞であり、集団の意思を反映したものであり、歴史を突き動かす力は民衆の意思であるという根源的な認識がある。しかし、ケイシーは個人の殻から抜け出し集団の中に飛び込み、さらには宇宙の根源とも結びつき、集団の意思を形成する原動力となり歴史の本流を創り出していく。<sup>(4)</sup>

(むすび)

スタインバックは晩年に近づくにつれ、その関心を集団の結合から個人の自立・尊厳へと大きく舵を切ることになる。例えば彼は『エデンの東』(*East of Eden*, 1952)では集団の脅威を糾弾し個人の自立・尊厳について熱弁をふるう。

…私はこう信じる——個々の人間の自由な、探求的な心こそ、この世で最も貴重なものであると。そして、私は次のもののために戦うだろう——誰にも命令されず欲する方向を目指す、心の自由のために。私はまた次のものと戦わねばならない——個人を制限し、破壊する一切の理念、宗教、あるいは政府と。(132)

スタインバックによれば、集団という生き物はその集団の生存、理念、目的の達成のために、その構成員を手段化・道具化する可能性を秘めている。例えば『エデンの東』では、語り手は軍隊組織を取り上げ、個々の隊員を手段化・道具化する典型的な集団として描いている。その一方で、語り手は西部への移住者達を理想的集団として扱い、次のように回想している。

…私が思うに、彼らは個人として自分自身を信頼し、自分自身を尊敬していたので、また疑いもなく彼らは自分達が優れていて潜在的に道徳的な集団であるということを知っていたので——こうした理由で、彼らは神に自分達自身の勇気と威厳を与え、そしてそれを受け取ったのである。(12)

人間はここでは一人ひとりが宇宙の根源である「一なる者」と結びついているので、個人は神聖であり信頼できる存在であるということになる。語り手もこの人間観に基づき、移住民達が「信頼できる自己」を堅持していたので理想的社会集団を形成していたと認識している。これを反転させると、理想的な社会集団を構築するためには、目覚めた個人の連帯が不可欠であるという認識となる。語り手はその後「選択の栄光」という言葉を用いて、自己に内在する「神性」を確立することが自己の人生を創造し開拓する要諦であると主張し、エマソンの「自己信頼」(self-reliance)と重なり合う。

本論はスタインバックが生涯強い関心を払ってきた「人間存在に宿る集団と個人の二重性」あるいは「集団と個の共生と相克」に関して主要な作品を通して考察してきた。総括すると、集団と個の関係は以下のようなプロセスを踏みながら、和解の道へと向かうことになる——(1) まず個人は生存競争の舞台となる人間社会にあって、生き残るために集団を形成する。(2) 形成された集団は個人の単なる集合体ではなく別の生き物へと変容し、集団独自の意思をもつ。(3) また集団は個人の尊厳を奪う傾向性にあり、個人は指導者も含め集団の目的のために手段化・道具化されるという潜在性をもつ。(4) その一方で、個人は個の自立を保持する民主的な理想集団を形成する能力も併せ持つ。(5) この時、個人は指導者を含めて、自己の尊厳を維持しながらも、自己犠牲を払って積極的に集団の目的・理念に貢献しようとする。(6) この場合、個人はより大きな集団へと結合し、果ては宇宙の根源たる「一なる者」へと合一することになる。それは個人の内面に「神性」を確立することで、集団と個人との和解を示す理想的社会集団を形成することを意味する。(7) 目覚めた個人の連帯はやがて社会変革を創出し、新しい歴史のページを切り開くことができる。

けだし、理想的な個人は集団と和解し、宇宙の根源的な存在「一なる者」と結びつき、自己に内在する「神性」を確立し、かつ集団に貢献する人物として登場する。

## Notes

- (1) 本論は次の3つの拙論の論考を土台に、より広い視点に立ち大幅に加筆し、スタインバックの物語世界に表出してくるその人間観を考察した。  
「スタインバックの人間観—集団と個」創価大学英文学会『英語英文学』第2巻第1号収録、(2) 「ジョン・スタインベクの死生観」創価大学英文学会『英語英文学』第15巻第2号収録、(3) 「『月は沈みぬ』にみる生と死」創価大学英文学会『英語英文学』第16巻第2号収録。
- (2) 『キャナリー・ロウ』にはジョージが孤独に耐えかねて自殺するというエピソードが挿入されている。このエピソードには、人間が他者との交流のなかで生の意味を見出す生き物であること、すなわち個人は集団に所属し、その構成員と交わることに人生の喜びを見出す生き物であるというメッセージが込められている。
- (3) 『怒りのぶどう』のノアは生存競争という社会環境の中で生存の基盤となる集団から離脱し、生存能力も低く明らかに敗者の姿を示している。しかし、別の視点から見ると、彼は『キャナリー・ロウ』の住民達と同じように、競争原理に貫かれた社会から離れ「無為自然」「小欲知足」の生活を営む理想的人物の型に属する。

(4) 『怒りのぶどう』のローズ・オブ・シャロンもまた個人の殻を打ち破り、集団との連帯を築いていることが、最終場面に象徴されている。

彼女は自分の赤ん坊の死産に直面しながらも、納屋で遭遇した餓死寸前の男を抱きかかえ、母乳を与えようと神秘的な微笑を浮かべる。当然、彼女の母乳は生命を養う源である。彼女はまさに自らの意思に基づき、移住農民達という飢えた集団と生命の連帯を分かち合う。そして、その慈しみの行為は、彼女が自己の内面に「神性」を体得しケイシーの説く大霊思想を共有していることを暗示している。なお、彼女は母の教えに従い、他者への愛を共有するまで精神的成長を遂げている。

### Works Cited

- Armitage, David. *The Declaration of Independence: A Global History*. Cambridge, Mass.: Harvard University press, 2007.
- Carpenter, Frederic I. "John Steinbeck: American Dreamer." *Steinbeck and His Critics*. eds. E.W. Tedlock, Jr., and C. V. Wicker. Albuquerque: U of New Mexico Press, 1969. 68-79.
- . "The Philosophical Joys." *Steinbeck and His Critics*. 241-49.
- Crockett, Kelley H., "The Bible and *The Grapes of Wrath*." *A Casebook on The Grapes of Wrath*. Ed. Agnes McNeil Donohue. New York: Thomas Y. Crowell Company, Inc. 1968.
- French, Warren. *John Steinbeck*. New York: Twayne Publishers, Inc., 1961.
- Marks, Lester Jay. *Thematic Design in the Novels of John Steinbeck*. The Hague: Mouton. 1969.
- Shockley, Martin Staples. "Christian Symbolism in *The Grapes of Wrath*." *Steinbeck and His Critics*. 266-274.
- Steinbeck John. *In Dubious Battle*. New York: Covici-Friede, 1937.
- . *The Long Valley*. New York: Viking Press, 1938.
- . *The Grapes of Wrath*. New York: Viking Press, 1939.
- . *The Moon Is Down*. New York: Viking Press, 1942.
- . *The Log from the Sea of Cortez*. New York: Viking Press, 1951.
- . *East of Eden*. New York: Viking Press, 1952.